

【第27回聖路加看護学会学術大会：シンポジウム】

その人らしい「口から食べる」を実現するために

杉山 理恵

I. はじめに

人にとって「口から食べる」という行為は、生命の維持に必要な栄養を充足するためだけの行為ではなく、人としての尊厳や楽しみのひとつであり、生活を潤すものである。その人らしい「口から食べる」を実現するには、食物を目で見て楽しみ、口で咀嚼し味わい、喉越しを感じるという一連の摂食嚥下機能に加え、食事をする際の時間や空間を共にする人、食事をする場所、食事内容が大きく影響する。

人は、病院に入院することにより、人としての尊厳や楽しみである「口から食べる」が脅かされる。そこで、入院患者のその人らしい「口から食べる」を実現するための高度実践看護師（advanced practice nurse：APN）の実践について、考えてみたいと思う。

II. 「口から食べる」を支援するための APN とは

日本において APN は、個人、家族、および集団に対して、ケア（Care）とキュア（Cure）の融合による高度な知識、技術を駆使して、対象の治療・療養過程の全般を管理・実践できる者と定義されている（日本学術会議健康・生活科学委員会看護学学科会，2011）。

この定義を「口から食べる」を支援する APN に置き換えると、疾病や加齢により摂食嚥下障害を有する人、家族、摂食嚥下障害を有する人々が所属する集団に対して、安全にその人らしく「口から食べる」を実現するためのケアとキュアの融合による高度な知識、技術を駆使して、対象者の治療・療養過程のその人らしい「口から食べる」を管理・実践できる者にとらえる。

筆者は、摂食嚥下障害看護認定看護師、慢性疾患看護専門看護師の資格を有することで、専門的知識・技術を有しながら、患者の「口から食べる」を支援するための APN の役割を果たす。そのため、「口から食べる」を支援する APN としては、日本看護協会が示す 6 つの役割（表 1）を担うことになる。

III. 急性期にある患者のその人らしい「口から食べる」を実現するために

日本医科大学付属病院（以下、当院）は、特定機能病院として超急性期の患者を受け入れる役割を担っており、入院患者の半数が緊急入院である。そのため、入院患者の多くが、病の急激な悪化や突然の事故などによる予期せぬ入院であり、身体的、心理的に危機的状況にある。

ここでは、急性期にある患者のその人らしい「口から食べる」を実現するための APN の姿勢と思考について述べていく。

1. 患者を包括的にアセスメントする

基本姿勢は、患者に寄り添い、目線を合わせ、患者がなにを望むのか、ていねいに聴くことが大切である。

APN は、毎日患者に介入できるとは限らない。そのため、最短時間で患者の心をつかむために、コミュニケーション能力を最大限発揮する。患者の真のニーズはなにか、患者の表情、声のトーン、話すスピードなど、五感をフルに導入し、アンテナを張り、患者が発する声にならない思いも逃さずキャッチしようと努力する。

「口から食べる」を支援する APN が最も知りたい患者の摂食嚥下機能は、評価ツールを用いて、専門的知識、技術を駆使し、評価およびアセスメントする。しかし、急性期にある患者は、呼吸・循環の状態、痛みのコントロール状況、体力の回復が、心理的側面に影響をおよぼし「口から食べる」につながる。

臨床でよく遭遇する場面は、慢性閉塞性肺疾患（chronic obstructive pulmonary disease：COPD）の急性増悪の患者や抜管後の患者が、呼吸が促迫しているため、嚥下と呼吸のパターンの乱れ、誤嚥のリスクが高まっている場面である。APN は、よく患者の呼吸状態を観察し、安静時と労作時の呼吸パターンの変化などから、「口から食べる」を開始するタイミングを見極める。

さらによく遭遇する場面は、排便コントロール不良に伴う、食事摂取量の低下である。口から食べ、消化管で消化吸収し、消化物を排泄する、という一連の営みがある。急性期にある患者は、身体的侵襲や心理的ストレスなどに加え、麻薬などの薬剤の使用により、腸管機能に

表1 専門看護師の役割

1. 個人、家族及び集団に対して卓越した看護を実践する。(実践)
2. 看護者を含むケア提供者に対しコンサルテーションを行う。(相談)
3. 必要なケアが円滑に行われるために、保健医療福祉に携わる人々とのコーディネーションを行う。(調整)
4. 個人、家族及び集団の権利を守るために、倫理的な問題や葛藤の解決を図る。(倫理調整)
5. 看護者に対しケアを向上させるため教育的役割を果たす。(教育)
6. 専門知識及び技術の向上並びに開発を図るために実践の場における研究活動を行う。(研究)

出典) 日本看護協会 (2022): 専門看護師. <https://nintei.nurse.or.jp/nursing/qualification/cns> (2022/10/28).

影響を及ぼす症例が多い。APN は、患者の「食べたくない」という発言の真意がどこにあるのか、排便状況を打診、聴診だけではなく、レントゲンなども含めアセスメントする。

APN は、患者のその人らしい「口から食べる」を実現するために、急性期にある患者の特徴を踏まえた身体的、心理的側面を中心に包括的にアセスメントする。

2. オーダーメイドによる支援

患者の「口から食べる」の機能を評価するための摂食嚥下機能評価方法は、いくつもの学会が推奨し、ガイドラインとして紹介されている。摂食嚥下機能評価方法に加え、嚥下訓練方法、食形態の目安、トロミのつけ方などについてもガイドが示されている。しかし、患者の摂食嚥下機能は、患者の個性ともいえるほど多様であり、特に気管切開カニューレを装着している患者の「口から食べる」においては、カニューレ抜去が優先か、経口摂取が優先か、case by case であり、マニュアルはない。そのため、APN は、ガイドラインを活用しつつも、患者の状態に合わせたオーダーメイドの支援により、その人らしい「口から食べる」を実現させることで、患者の quality of life (QOL) の維持向上に貢献する。

3. 患者の「いま!」を逃さないために、踏み出すタイミングを見極める

看護学における理論や知識は、非常に重要であり、看護実践の糧となる。しかし、臨床現場における説明しような「看護師 (APN) の直感」が、患者の「やる気=口から食べる」に火をともし経験をすることがある。

たとえば、患者の「ワタンスープが食べたい」という一言が、APN の「コンビニ (院内の) に行って、食べたいものを買ったらいいのに」という直感につながる。そして APN は、患者の身体状況は院内のコンビニまでの往復に耐えられるか、周囲の状況は実現可能か、を瞬時に判断し、患者の「いま!」を逃さないために踏み出す。結果、APN と言語聴覚士が、患者の車椅子を押してコンビニへ行く。患者は、ワタンスープ以外にも、あれこれと購入し、陽気に帰ってくる。さらに、いままでほとんど食事が食べられていなかったのにもかかわらず、買って来たワタンスープを1個完食した。

4. 組織への影響

コンビニへ買い物に行き、ワタンスープを完食した患者の表情は、自信に満ち、生きよう、食べようという意欲がみなぎっていた。この経験を、病棟看護師とともに共有できたことが、APN として重要であったと考える。それまで、病棟看護師は、患者が病室の外へ出ること、コンビニまで買い物に行くことを想像することはできていたが、行動を起こすことができていなかった。しかし、この日をきっかけに、コンビニへ買い物に行くことが、患者にとって特別なことではなく、日常的なことに変化していった。

APN は、病棟という組織の泉に「きっかけ」という一滴の雫を落とす役割にすぎない。しかし、APN が落としたその一滴の雫の波紋が、病棟全体に行き渡ること、患者のその人らしい「口から食べる」につなげることができ、病棟に変化をもたらすことができた。

APN は、患者・家族個人に対してのアウトカムも重要であるが、組織へ影響を与えてこそ、高度実践であると考えられている。

5. 仲間をつくること

患者のその人らしい「口から食べる」を支援するために仲間をつくることは、最も重要なことであると考えられる。患者の「口から食べる」を支援するためには、治療を実施する主治医、日常生活のケアを実施する病棟看護師のほか、口腔環境を評価しケアアドバイスをくれる歯科衛生士、食事を提供するための管理栄養士、訓練を協働するリハビリスタッフがあり、ときには薬剤調整のために薬剤師とディスカッションすることもある。APN は、常日頃から、多職種とお互いの専門性を尊重し、患者にとってなにか大切に語り合える、顔の見える関係性づくりをしておくことが必要である。

IV. APN として心がけていること

APN としていくつかが心がけていることがある。1つ目は、常に5つの役割(実践、相談、調整、倫理調整、教育)を意識して臨床現場に介入していくことである。つまり、自分が APN として患者・家族、組織の課題を解決するために果たすべき役割は何なのか、を考えながら行動するということである。その理由は、課題解決の

ためには1つの役割だけではなく、複数の役割を臨機応変に使い分ける必要があり、課題が複雑であればあるほど、周囲の状況に巻き込まれて行ってしまうため、APNとしての立ち位置を常に意識しておくことが重要である。

2つ目は、常に自分の思考を言語化し他者へ伝えるということ、他者の意見を聴くということである。先にも述べたが、患者の「口から食べる」を実現させるために、互いがなにをすべきか話し合える仲間がいることは、APNの大きな強みである。仲間と刺激し合うことで、APNとしての存在意義を確認し、高め合っていける。

3つ目は、常に新しい情報に触れることを意識している。医療・看護は日々進歩しているため、国内外でどのような「口から食べる」の看護が展開されているのか、どのような看護研究が行われているのか、アンテナを張り、情報収集することは、APNとして常にブラッシュアップし続けるために重要である。つまりは、臨床現場の課題を解決する手段や最新のエビデンスを知るための努力をするということである。

最後に、患者がその人らしい「口から食べる」を実現

するために、「本当にこれがベストなのか？ ベストだったのか？」と自分の介入に満足することなく、1つひとつの事例を毎回リフレクションすること、探求し続けることがAPNとしての看護の醍醐味であると考えている。

謝辞

第27回聖路加看護学会学会学術集会でのシンポジストとしての発表、本稿執筆の機会をいただきました。大会長の有森直子先生、ならびに企画委員の先生方に、心より感謝申し上げます。

引用文献

- 日本学術会議健康・生活科学委員会看護学学科会 (2011). 提言 高度実践看護師制度の確立に向けて；グローバルスタンダードの提言. <https://www.scj.go.jp/ja/info/kohyo/pdf/kohyo-21-t135-2.pdf> (2022/10/28).
- 日本看護協会 (2022): 専門看護師. <https://nintei.nurse.or.jp/nursing/qualification/cns> (2022/10/28).